

『まあだだよ』は、黒澤明監督による 1993 年公開の日本映画。大映が製作し、東宝の配給により公開された。

概要

内田百閒の随筆を原案に、戦前から戦後にかけての百閒の日常と、彼の教師時代の教え子との交流を描いている。黒澤作品の前・中期に見られる戦闘・アクションシーン等は皆無で、終始穏やかなトーンで話が進行する。キャッチ・コピーは「今、忘れられているとても大切なものがここにある。」

黒澤明の監督生活 50 周年・通算 30 作目の記念作品として大きな期待を集めたが、同時期に公開された『ロボコップ 3』や『許されざる者』などのヒット作に押され、興行的には失敗となった。

この作品の公開後、次回作を書いている矢先、骨折。闘病後 1998 年 9 月 6 日に黒澤は脳卒中により逝去し、本作が半世紀以上の監督生活を全うした黒澤の遺作となった。

2012 年現在、日劇東宝（現：TOHO シネマズ日劇スクリーン系列で 4 月期に封切られた最後の実写映画である。

あらすじ

法政大学のドイツ語教師・百閒先生は随筆家としての活動に専念するため学校を去ることになり、学生たちは『仰げば尊し』を歌って先生を送る。職を辞したのちも、先生の家には彼を慕う門下生たちが集まり、鍋を囲み酒を酌み交わす。先生には穏やかな文士生活が訪れるはずであった。しかし時代は戦争の只中、先生も空襲で家を失ってしまう。妻と 2 人、先生は貧しい小屋で年月を過ごすことを余儀なくされるが、戦後門下生たちの取り計らいで新居を構えることを得る。

昭和 21 年、彼らは先生の健康長寿の祝いのために「摩阿陀会」なる催しを開く。なかなか死にそうにない先生に「まあだかい?」と訊ね、先生が「まあだだよ!」と応える会である。月日は経ち、17 回目の「摩阿陀会」は先生の喜寿のお祝いも兼ねて盛大に開かれる。門下生たちの頭にも白いものが交り、彼らの孫も参加したこの会で、先生は突然体調を崩してしまう。大事をとって帰ることになるが、かつての教え子たちは昔と同じように『仰げば尊し』を歌って会場を後にする先生を送るのだった。

その夜、付き添った門下生たちが控える部屋の奥で、先生はおだやかに眠る。夢の中、かくれんぼをしている少年は、友達に何度も「まあだだよ!」と叫ぶ。少年が見上げた夕焼けの空は、やがて深く彩られていった。

キャスト

内田百閒：松村達雄、奥さん：香川京子、高山：井川比佐志、甘木：所ジョージ、桐山：油井昌由樹、沢村：寺尾聰、小林(百閒の主治医)：日下武史、亀山(百閒の学友、和尚)：小林亜星、多田：平田満、

監督・脚本・編集：黒澤明 原作：内田百閒

エピソード

スタッフの野上照代は、東京で出版社に勤めていた時に原稿を受け取りに内田百閒の家を訪れ、本人と面会したことがある。おみやげの日本酒を見せると、急に態度が変わり、ご機嫌になったという。

黒沢清監督は「黒澤明では『まあだだよ』が好き。あっこ（あそこ）まで行ったら最早凄いいね」と語っている。この作品にからめて黒澤は周囲に対し、「これが最後の作品ですかね?」「まあだだよ」などと冗談をいっていたという。

香川京子の演技があまりに見事だったので、脚本でも指示がなく、指導もしていない。監督は現場でもほとんど見ていないという。

登場する猫は重たかったので抱くときは苦労したという。また、暴れることもあったので眠くなるような薬を飲ませて撮影したらしい。